

平櫛田中コレクション 2011 The Collection of Denchu Hirakushi
 (2011年4月29日-5月12日 | 東京藝術大学 正木記念館1F)

1		浴女 Study for Bathing Woman	石井鶴三 ISHII, Tsuruzo	大正14年 (1925) ブロンズ	全高33.5 cm
2		観音と餓鬼 Guanyin and Preta	大内青圃 OUCHI, Seiho	昭和24年 (1949) 木 彩色	高25.2 cm
3		パイプ Pipe	大内青圃 OUCHI, Seiho	昭和25年 (1950) 以前 素焼	高5.6 cm 長14.1 cm
4		盲人像 Blind Man	大橋敏男 OHASHI, Toshio	大正3年 (1914) 木	全高39.5 cm
5		田中像 Statue of Hirakushi Denchu	喜多武四郎 KITA, Takeshiro	昭和9年 (1934) ブロンズ	全高38.2 cm
6		鷹 Hawk	佐藤朝山 SATO, Chozan	昭和9年 (1934) 頃 銀 レリーフ	20.4×10.4 cm
7		芭蕉像 Poet Matsuo Basho	竹内久一 TAKENOUCI, Kyuichi	明治19年 (1886) 木	高14.5 cm
8		ねこ Cat	辻晋堂 TSUJI, Shindo	昭和31年 (1956) 陶彫	高26.7 cm
9		石井氏像 Statue of Mr. Ishii	中原悌二郎 NAKAHARA, Teijiro	大正5年 (1916) ブロンズ	高39.3 cm
10		良寛 Ryokan	橋本平八 HASHIMOTO, Heihachi	昭和9年 (1934) 木	高27.4 cm
11		男女川 The Sumo Wrestler (Minanogawa)	長谷川義起 HASEGAWA, Yoshioki	昭和25 (1950) 以前 ブロンズ	全高37.7 cm
12		活人箭 Katsujinsen	平櫛田中 HIRAKUSHI, Denchu	明治41年 (1908) 原型 (石膏) 制作 昭和37年 (1962) 木彫で再現 木	全高44.2 cm
13		横笛堂(さつきころ) Yokobue-do (The Nun, Yokobue)	平櫛田中 HIRAKUSHI, Denchu	大正2年(1913) 木	全高90.5 cm
14		燈下萬葉 (良寛和尚) Priest Ryokan Reading Man'yo-shu	平櫛田中 HIRAKUSHI, Denchu	昭和23年 (1948) 木 彩色 bronze	総高55.5 cm 像高50.4 cm
15		臥裸婦 Lying Female Nude	藤井浩佑 FUJII, Koyu	昭和25年 (1950) 以前 ブロンズ	全高17.2 cm
16		仔鹿 Fawn	藤川勇造 FUJIKAWA, Yuzo	昭和5年 (1930) ブロンズ	全高6.7 cm
17		あひる Duck	藤川勇造 FUJIKAWA, Yuzo	昭和8年 (1933) ブロンズ	全高9.9 cm
18		老婆 Old Woman	堀進二 Hori, Shinji	大正4年 (1915) ブロンズ	高38.0 cm
19		裸婦 Female Nude	松原松造 MATSUBARA, Shozo	昭和10年 (1935) ブロンズ	全高56.7 cm
20		蛙 Frog II	宮本理三郎 MIYAMOTO, Risaburo	昭和9年 (1934) 木 彩色	全高3.3 cm
21		茄子 Eggplant	宮本理三郎 MIYAMOTO, Risaburo	昭和25年 (1950) 以前 木	高6.3 cm
22		俳人萍雨子 The Haiku Poet, Byoushi	村田徳次郎 MURATA, Tokujiro	昭和24年 (1949) ブロンズ	全高42.2 cm
23		狂言釣狐 (根付) Kyogen Play Tsure-gitsune (Netsuke)	森川杜園 MORIKAWA, Toen	19世紀 江戸-明治時代 ヒノキ材製 彩色	高11.9 cm
24		南洋の子供 Child of the Southern Islands	矢崎虎夫 YAZAKI, Torao	昭和25年 (1950) 以前 木	全高17.3 cm
25		相撲浮彫 Relief of Sumo Wrestling	山本豊市 YAMAMOTO, Toyoichi	昭和9年 (1934) ブロンズ	12.0×12.7 cm
26		鰯 (ごまめ) Dried Sardines	吉田白嶺 YOSHIDA, Hakurei	- 木 レリーフ 彩色	12.0×11.8 cm
27		翡翠 (かわせみ) Kingfisher	吉田白嶺 YOSHIDA, Hakurei	- ブロンズ	全高8.4 cm

作家解説

石井鶴三の彫刻『大内青圃』、大内青圃の彫刻『大橋敏男』、喜多武四郎の彫刻『森川杜園』、矢崎虎夫の彫刻『山本豊市』、竹内久一の彫刻『辻晋堂』、鳥取生まれの彫刻家大内青圃の彫刻『大内青圃』、大内青圃の彫刻『大橋敏男』、喜多武四郎の彫刻『森川杜園』、矢崎虎夫の彫刻『山本豊市』、竹内久一の彫刻『辻晋堂』、鳥取生まれの彫刻家大内青圃の彫刻『大内青圃』、大内青圃の彫刻『大橋敏男』、喜多武四郎の彫刻『森川杜園』、矢崎虎夫の彫刻『山本豊市』、竹内久一の彫刻『辻晋堂』

石井鶴三（1887-1973）東京生まれ。小山正太郎に洋画、加藤景雲に木彫を学ぶ。東京美術学校卒業後、日本美術院研究所で田中、佐藤朝山、中原悌二郎らと塑造の研究に励んだ。1944年東京美術学校教授、1950年日本芸術院会員。1960年相撲博物館館長。彫刻の他にも油彩画、水彩画、版画や新聞小説の挿絵なども行った。

大内青圃の彫刻『大橋敏男』、大内青圃の彫刻『大橋敏男』、喜多武四郎の彫刻『森川杜園』、矢崎虎夫の彫刻『山本豊市』、竹内久一の彫刻『辻晋堂』、鳥取生まれの彫刻家大内青圃の彫刻『大内青圃』、大内青圃の彫刻『大橋敏男』、喜多武四郎の彫刻『森川杜園』、矢崎虎夫の彫刻『山本豊市』、竹内久一の彫刻『辻晋堂』

東京生まれ。父は仏教学者大内青巒。東京美術学校に入学し、高村光雲に木彫を、水谷鉄也に塑造を学ぶ。1927年日本美術院同人。生涯仏像彫刻を作り、仏彫に新しい一面を切り開いた。「自分については余り語るのを好まない大内君は黙々として制作に精進しその帰結を求めて作品に語らせ独自の境地を開拓してきた作家である。」と、田中談にある。

大橋敏男の彫刻『大橋敏男』、大橋敏男の彫刻『大橋敏男』、喜多武四郎の彫刻『森川杜園』、矢崎虎夫の彫刻『山本豊市』、竹内久一の彫刻『辻晋堂』、鳥取生まれの彫刻家大内青圃の彫刻『大内青圃』、大内青圃の彫刻『大橋敏男』、喜多武四郎の彫刻『森川杜園』、矢崎虎夫の彫刻『山本豊市』、竹内久一の彫刻『辻晋堂』

京都生まれ。東京工業大学卒業後、田中に師事。1917年、日本美術院の院友に推挙される。日本美術院展に出品された作品はほぼ全て、一本の木片から削り出し制作されている。本展の出品作《盲人像》では、前のめりにしゃがんだ像の危ういバランス感覚が印象的だが、背中の中心には木目の中心がちょうど重なっており、そこには大橋の入念な意図が読み取れる。近代という時代に埋もれてしまったすぐれた作家の一人である。

喜多武四郎の彫刻『森川杜園』、喜多武四郎の彫刻『森川杜園』、矢崎虎夫の彫刻『山本豊市』、竹内久一の彫刻『辻晋堂』、鳥取生まれの彫刻家大内青圃の彫刻『大内青圃』、大内青圃の彫刻『大橋敏男』、喜多武四郎の彫刻『森川杜園』、矢崎虎夫の彫刻『山本豊市』、竹内久一の彫刻『辻晋堂』

東京生まれ。戸張孤雁に師事。1920年（大正9）日本美術院の研究会員となり、石井鶴三の指導を受ける。21年（同10）院友、27年（昭和2）同人となる。美術院彫塑部の解散後は、日本画府彫塑部会員に迎えられた。一貫して人体をモチーフにした制作を行い、一切の余計を排した造形性を獲得した。橋本平八の『純粹彫刻論』で、田中に続いて序文を書いている。

佐藤朝山の彫刻『大内青圃』、佐藤朝山の彫刻『大内青圃』、喜多武四郎の彫刻『森川杜園』、矢崎虎夫の彫刻『山本豊市』、竹内久一の彫刻『辻晋堂』、鳥取生まれの彫刻家大内青圃の彫刻『大内青圃』、大内青圃の彫刻『大橋敏男』、喜多武四郎の彫刻『森川杜園』、矢崎虎夫の彫刻『山本豊市』、竹内久一の彫刻『辻晋堂』

佐藤朝山（1888-1963）福島で代々宮彫師をつとめた家に生まれ、幼時より父や叔父に彫技を学んだ。1904年（明治37）、上京して山崎朝雲に師事。14年（大正3）、日本美術院に加わり、同年に同人となる。22年（同11）渡仏し、ブルーデルに師事した。帰国後は洋風彫塑と日本の伝統を踏まえた作品を発表する。のちに師の朝雲と不和になったことから、師からもらった朝山の号を返上して、本名の清藏、続いて玄々と名乗った。

大内青圃の彫刻『大橋敏男』、大内青圃の彫刻『大橋敏男』、喜多武四郎の彫刻『森川杜園』、矢崎虎夫の彫刻『山本豊市』、竹内久一の彫刻『辻晋堂』、鳥取生まれの彫刻家大内青圃の彫刻『大内青圃』、大内青圃の彫刻『大橋敏男』、喜多武四郎の彫刻『森川杜園』、矢崎虎夫の彫刻『山本豊市』、竹内久一の彫刻『辻晋堂』

江戸生まれ。堀内龍仙、川本州楽に牙彫を学ぶ。1880年、歓古美術界で古仏に感銘し木彫家を志す。1888年より東京美術学校彫刻科で務め没するまで任を全うした。代表作としては、1893年シカゴ万国博覧会に出品した《技芸天》や《神武天皇像》（両者とも当美術館所蔵）などがある。田中は「一に久一、二がなくて、三に杜園」と語ったことがあり、高く評価していた。

大橋敏男の彫刻『大橋敏男』、大橋敏男の彫刻『大橋敏男』、喜多武四郎の彫刻『森川杜園』、矢崎虎夫の彫刻『山本豊市』、竹内久一の彫刻『辻晋堂』、鳥取生まれの彫刻家大内青圃の彫刻『大内青圃』、大内青圃の彫刻『大橋敏男』、喜多武四郎の彫刻『森川杜園』、矢崎虎夫の彫刻『山本豊市』、竹内久一の彫刻『辻晋堂』

鳥取生まれ。1931年に上京して独立美術研究所で素描を学ぶが、1933年の第20回院展に《千家元麿氏像》が入選し、木彫に転じる。田中が「人材欠乏の木彫界の将来辻をおいて他に期待すべき木彫人はない」と大きく期待を寄せていた作家であったが、戦後はあまり木彫を作らなくなり、制作の大半を陶彫に移し、抽象的な形態へと向かっていった。晩年の田中が好んで揮毫した言葉に「いまやらねばいつできる わしがやらねばたれがやる」というものがあるが、これは、田中が辻の工房を訪れた際、壁に張られていたこの自警文に感銘を受けて自身も使うようになった文である。《ねこ》は1966年、一番最後に田中コレクションの中へと加わった作品である。

橋本平八の彫刻『橋本平八』、橋本平八の彫刻『橋本平八』、喜多武四郎の彫刻『森川杜園』、矢崎虎夫の彫刻『山本豊市』、竹内久一の彫刻『辻晋堂』、鳥取生まれの彫刻家大内青圃の彫刻『大内青圃』、大内青圃の彫刻『大橋敏男』、喜多武四郎の彫刻『森川杜園』、矢崎虎夫の彫刻『山本豊市』、竹内久一の彫刻『辻晋堂』

橋本平八の彫刻『橋本平八』、橋本平八の彫刻『橋本平八』、喜多武四郎の彫刻『森川杜園』、矢崎虎夫の彫刻『山本豊市』、竹内久一の彫刻『辻晋堂』、鳥取生まれの彫刻家大内青圃の彫刻『大内青圃』、大内青圃の彫刻『大橋敏男』、喜多武四郎の彫刻『森川杜園』、矢崎虎夫の彫刻『山本豊市』、竹内久一の彫刻『辻晋堂』

北海道生まれ。はじめ洋画を学んでいたが、ロダンと萩原守衛の影響で彫刻へと転向し、日本美術院に参加する。田中は中原を次のように評している。「君は一見直情動行で、物に拘泥しない超越的な所があつた。習作する態度は極めて眞摯なるもので、一度後ろに下がって、じりゝ前にすゝんで土をつける様子は、剣を執つて敵に向つた感じであつた。」代表作としては《墓守》が挙げられる。寡作であり、気に入らない作品は自ら壊したため、現存する作品が極めて少ない。

三重生まれ。郷里の三宅正直に学んだのち、日本美術院の佐藤朝山に師事した。1922年（大正11）日本美術院の研究会員、27年（昭和2）同人となる。将来を期待されていたが、35年（同10）脳溢血のため38歳で早逝。田中と橋本は子弟の関係にはないが、田中は自分より25歳も年少だった橋本の才能を愛し、生前から作品を購入していた。本学が所蔵する橋本の作品14点は、全て田中が寄贈したものである。また橋本の没後、実弟で前衛詩人の北園克衛の編集により『純粹彫刻論』（昭森社、昭和17年）が刊行された際には、田中がその序文を書いている。

富山生まれ。本名勝之。1915年東京美術学校彫刻科本科を卒業。1920年の第二回帝展に《靈光》が初入選。以来入選を続け、《青空高く投げ！（円盤）》が推薦を受けてからは無鑑査となった。戦後は日展審査員、評議員ほか日本彫塑クラブ理事などを歴任した。スポーツ、ことに相撲を主題とした作品を得意とし、1936年のベルリン・オリンピック芸術競技《両構（力士）》、1938年の双葉山五連勝の表彰額《龍虎》などを制作。その一方で1934年の室戸台風の被害を受けた学生、教員らを追悼する帝国教育塔の浮彫《明暗》も彼の作品である。1974年、紫綬褒章。

岡山生まれ。はじめ大阪で人形師の中谷省古に彫刻の手ほどきを受けた後、上京し高村光雲の門下生となって木彫を学ぶ。1898年、湯島の麟祥院で西山禾山が臨済録について語るのを聞き、その後の思想形成、制作のモチーフなどに大きな影響を受ける。1908年、日本彫刻会第1回展に《活人箭》を出品し、岡倉天心の推奨を受ける。再興院展にて精力的に作品を発表し続け、1944年より東京美術学校彫刻科木彫部教授となつて後輩の指導を行う。1950年、自作も含めた所蔵の彫刻作品を東京藝術大学へ寄贈。その後も寄贈を続け、現在田中コレクションは計149点に及んでいる。100歳の誕生日に約30年分の木材を買い込むというエピソードから類推できるように最期まで旺盛な制作意欲が衰えることはなかった。

富山生まれ。本名勝之。1915年東京美術学校彫刻科本科を卒業。1920年の第二回帝展に《靈光》が初入選。以来入選を続け、《青空高く投げ！（円盤）》が推薦を受けてからは無鑑査となった。戦後は日展審査員、評議員ほか日本彫塑クラブ理事などを歴任した。スポーツ、ことに相撲を主題とした作品を得意とし、1936年のベルリン・オリンピック芸術競技《両構（力士）》、1938年の双葉山五連勝の表彰額《龍虎》などを制作。その一方で1934年の室戸台風の被害を受けた学生、教員らを追悼する帝国教育塔の浮彫《明暗》も彼の作品である。1974年、紫綬褒章。

岡山生まれ。はじめ大阪で人形師の中谷省古に彫刻の手ほどきを受けた後、上京し高村光雲の門下生となって木彫を学ぶ。1898年、湯島の麟祥院で西山禾山が臨済録について語るのを聞き、その後の思想形成、制作のモチーフなどに大きな影響を受ける。1908年、日本彫刻会第1回展に《活人箭》を出品し、岡倉天心の推奨を受ける。再興院展にて精力的に作品を発表し続け、1944年より東京美術学校彫刻科木彫部教授となつて後輩の指導を行う。1950年、自作も含めた所蔵の彫刻作品を東京藝術大学へ寄贈。その後も寄贈を続け、現在田中コレクションは計149点に及んでいる。100歳の誕生日に約30年分の木材を買い込むというエピソードから類推できるように最期まで旺盛な制作意欲が衰えることはなかった。

東京生まれ。浩祐とも。神田錦町の唐木細工師藤井祐敬を父とする。はじめ小山正太郎の私塾不同舎で満谷国四郎に素描を学び、のち東京美術学校彫刻科本科を卒業する。卒業後直ちに文展に出品し、1911年第五回文展出品の《鏡の前》、1914年第八回文展出品の《トロを待つ坑婦》はいずれも三等賞を受け、1916年には日本美術院同人となった。後期はマイヨールの影響を強く受け、なめらかな体躯の女性像を数多く残した。東京芸術大学には本展の出品作に通じる女性像《裸婦》がある。著書に『彫刻を試る人へ』（1924）、『琵琶の葉と犬』（1934頃）など。

東京生まれ。浩祐とも。神田錦町の唐木細工師藤井祐敬を父とする。はじめ小山正太郎の私塾不同舎で満谷国四郎に素描を学び、のち東京美術学校彫刻科本科を卒業する。卒業後直ちに文展に出品し、1911年第五回文展出品の《鏡の前》、1914年第八回文展出品の《トロを待つ坑婦》はいずれも三等賞を受け、1916年には日本美術院同人となった。後期はマイヨールの影響を強く受け、なめらかな体躯の女性像を数多く残した。東京芸術大学には本展の出品作に通じる女性像《裸婦》がある。著書に『彫刻を試る人へ』（1924）、『琵琶の葉と犬』（1934頃）など。

東京生まれ。浩祐とも。神田錦町の唐木細工師藤井祐敬を父とする。はじめ小山正太郎の私塾不同舎で満谷国四郎に素描を学び、のち東京美術学校彫刻科本科を卒業する。卒業後直ちに文展に出品し、1911年第五回文展出品の《鏡の前》、1914年第八回文展出品の《トロを待つ坑婦》はいずれも三等賞を受け、1916年には日本美術院同人となった。後期はマイヨールの影響を強く受け、なめらかな体躯の女性像を数多く残した。東京芸術大学には本展の出品作に通じる女性像《裸婦》がある。著書に『彫刻を試る人へ』（1924）、『琵琶の葉と犬』（1934頃）など。

東京生まれ。浩祐とも。神田錦町の唐木細工師藤井祐敬を父とする。はじめ小山正太郎の私塾不同舎で満谷国四郎に素描を学び、のち東京美術学校彫刻科本科を卒業する。卒業後直ちに文展に出品し、1911年第五回文展出品の《鏡の前》、1914年第八回文展出品の《トロを待つ坑婦》はいずれも三等賞を受け、1916年には日本美術院同人となった。後期はマイヨールの影響を強く受け、なめらかな体躯の女性像を数多く残した。東京芸術大学には本展の出品作に通じる女性像《裸婦》がある。著書に『彫刻を試る人へ』（1924）、『琵琶の葉と犬』（1934頃）など。

東京生まれ。浩祐とも。神田錦町の唐木細工師藤井祐敬を父とする。はじめ小山正太郎の私塾不同舎で満谷国四郎に素描を学び、のち東京美術学校彫刻科本科を卒業する。卒業後直ちに文展に出品し、1911年第五回文展出品の《鏡の前》、1914年第八回文展出品の《トロを待つ坑婦》はいずれも三等賞を受け、1916年には日本美術院同人となった。後期はマイヨールの影響を強く受け、なめらかな体躯の女性像を数多く残した。東京芸術大学には本展の出品作に通じる女性像《裸婦》がある。著書に『彫刻を試る人へ』（1924）、『琵琶の葉と犬』（1934頃）など。

現在の高松市生まれ。漆彫の玉楮象谷の嫡孫である。1908年東京美術学校彫刻科を卒業し、農務省海外練習生として渡仏。翌年、アカデミー・ジュリアンのジャン＝ポール・ローランスのもとで素描を学んだ。1910年にロダンに認められて、彼の助手を務める。1915年に病のため帰国した後は二科会会員となって活動。妻の藤川栄子は画家である。

東京生まれ。太平洋画会に入会し、新海竹太郎に学ぶ。1916年、日本美術院研究所に通い、中原悌二郎、保田龍門らと互いにモデルになり研究に励む。《老婆》は第12回文展において特選を獲得した作品である。

東京生まれ。1922年から藤井浩佑に師事する。1923年から太平洋画会研究所彫塑部に入り、院展に参加、1936年に同人となる。1959年に燦々会を結成するが、その後脱会して太平洋研究所に入る。『松原松造作品集』（2004）がある。

東京生まれ。1922年から藤井浩佑に師事する。1923年から太平洋画会研究所彫塑部に入り、院展に参加、1936年に同人となる。1959年に燦々会を結成するが、その後脱会して太平洋研究所に入る。『松原松造作品集』（2004）がある。

大分生まれ。1924年（大正3）、三谷光月に師事し、翌25年（同14）に上京し、佐藤朝山の門下生となる。日本美術院に参加し、34年（昭和9）院友に推挙される。戦後は生活のために、田中のもとで仕事の手伝いをする事があったという。《なまず》は田中の求めで、高村光太郎《鯨》を模刻した作品である。田中コレクションの中で宮本理三郎の作品は12点と最も数が多い。動物や野菜をテーマにした作品に卓越した彫技を発揮した。

大分生まれ。1924年（大正3）、三谷光月に師事し、翌25年（同14）に上京し、佐藤朝山の門下生となる。日本美術院に参加し、34年（昭和9）院友に推挙される。戦後は生活のために、田中のもとで仕事の手伝いをする事があったという。《なまず》は田中の求めで、高村光太郎《鯨》を模刻した作品である。田中コレクションの中で宮本理三郎の作品は12点と最も数が多い。動物や野菜をテーマにした作品に卓越した彫技を発揮した。

大分生まれ。1924年（大正3）、三谷光月に師事し、翌25年（同14）に上京し、佐藤朝山の門下生となる。日本美術院に参加し、34年（昭和9）院友に推挙される。戦後は生活のために、田中のもとで仕事の手伝いをする事があったという。《なまず》は田中の求めで、高村光太郎《鯨》を模刻した作品である。田中コレクションの中で宮本理三郎の作品は12点と最も数が多い。動物や野菜をテーマにした作品に卓越した彫技を発揮した。

大阪生まれ。1919年に京都市美術工芸学校本科図案科を卒業。1924年より日本美術院で彫刻の研究を始め、石井鶴三や喜多武四郎らの指導を受けて内面性の表現を追求した。1926年の第十三回院展に《小児像》が初入選、1938年に同人となり、1961年の日本美術院彫塑部解散まで院展に出品し続けた。解散後は同志と祭々会を結成し、同会に《親鸞聖人像》（1965）などを出品。1952年から1967年までは東京芸術大学美術学部で塑像担当の講師を務めた。『村田徳次郎作品集』（1975）は村田の歿後、彼の教え子が中心となって編纂した作品集である。

奈良生まれ。内藤其淵に絵画を学ぶ。柴田是真の勧めにより奈良一刀彫を始め、春日大社等の仕事に従事するとともに、数多くの仏像や社寺の宝物の模造を行った。優れた彩色技術は田中に影響を与えた。田中は戦前から森川杜園の作品を熱心に蒐集しており、田中コレクションの中には5点所蔵される。狂言においても高い技能を有し、しばしば彫刻の題材に用いている。

奈良生まれ。内藤其淵に絵画を学ぶ。柴田是真の勧めにより奈良一刀彫を始め、春日大社等の仕事に従事するとともに、数多くの仏像や社寺の宝物の模造を行った。優れた彩色技術は田中に影響を与えた。田中は戦前から森川杜園の作品を熱心に蒐集しており、田中コレクションの中には5点所蔵される。狂言においても高い技能を有し、しばしば彫刻の題材に用いている。

長野生まれ。1923年より田中に師事し、1929年に院展初入選。1931年に東京美術学校彫刻科を卒業し、1934年には院友となる。二度に渡り満州と朝鮮へ東洋美術を視察し、インドネシアではポロブドゥルの仏蹟などを巡った。1964年にはフランスの彫刻家オシップ・ザッキンに師事し、パリで個展も行った。鮮やかな刀跡を生かした木彫を制作したが、その表現は箱根彫刻の森美術館に所蔵されるブロンズ像《托鉢》にも応用されている。1973年にはパリ市バナンセンヌ公園にブロンズの大作《雲水群像》が設置された。

東京生まれ。中学卒業後、戸張孤雁に師事。1918（大正7）年、太平洋画会研究所に入り、彫刻と素描を学ぶ。1924（同13）年渡仏してマイヨールに師事し、4年間過ごす。帰国後は仏像への関心を深め、1930年代には乾漆技法を研究する。1949年（昭和24）東京芸術大学講師、1953年（同28）に教授に就任し、多くの学生を指導した。田中コレクション中、山本豊市の作品は7点あり、宮本理三郎に続いて多い。

東京生まれ。中学卒業後、戸張孤雁に師事。1918（大正7）年、太平洋画会研究所に入り、彫刻と素描を学ぶ。1924（同13）年渡仏してマイヨールに師事し、4年間過ごす。帰国後は仏像への関心を深め、1930年代には乾漆技法を研究する。1949年（昭和24）東京芸術大学講師、1953年（同28）に教授に就任し、多くの学生を指導した。田中コレクション中、山本豊市の作品は7点あり、宮本理三郎に続いて多い。

東京生まれ。中学卒業後、戸張孤雁に師事。1918（大正7）年、太平洋画会研究所に入り、彫刻と素描を学ぶ。1924（同13）年渡仏してマイヨールに師事し、4年間過ごす。帰国後は仏像への関心を深め、1930年代には乾漆技法を研究する。1949年（昭和24）東京芸術大学講師、1953年（同28）に教授に就任し、多くの学生を指導した。田中コレクション中、山本豊市の作品は7点あり、宮本理三郎に続いて多い。

東京生まれ。四条派の飯島光峨に日本画を学んだが、実弟の彫刻家吉田芳明の活躍に触発されて彫刻を志し、月谷初子に彫塑の指導を受けた。岡倉天心の創設した日本彫刻会に参加したのち、1914年（大正3）、日本美術院彫刻部に加わり、同人となる。山本鼎の農民美術運動に協力し、生活と彫刻との関係を追求した。小禽類の精緻な作品を数多く残す。埴輪や乾漆技法の研究も行った。

東京生まれ。四条派の飯島光峨に日本画を学んだが、実弟の彫刻家吉田芳明の活躍に触発されて彫刻を志し、月谷初子に彫塑の指導を受けた。岡倉天心の創設した日本彫刻会に参加したのち、1914年（大正3）、日本美術院彫刻部に加わり、同人となる。山本鼎の農民美術運動に協力し、生活と彫刻との関係を追求した。小禽類の精緻な作品を数多く残す。埴輪や乾漆技法の研究も行った。

東京生まれ。四条派の飯島光峨に日本画を学んだが、実弟の彫刻家吉田芳明の活躍に触発されて彫刻を志し、月谷初子に彫塑の指導を受けた。岡倉天心の創設した日本彫刻会に参加したのち、1914年（大正3）、日本美術院彫刻部に加わり、同人となる。山本鼎の農民美術運動に協力し、生活と彫刻との関係を追求した。小禽類の精緻な作品を数多く残す。埴輪や乾漆技法の研究も行った。